

投資先は倒産経験者

地方を興す 2

かわる金融



荒井さん(左)は倒産から再起し、福島銀行の担当者と自社を売り込んでいる(1月20日、福島市で) 一秋山洋成撮影

低金利で減益続く

地域金融機関を取り巻く環境は厳しさを増している。全国の地域銀行106行の16年3月期決算は、本業の利益を示す実質業務純益が前期比1.8%減となり、3期連続で減少した。

金融庁は、金利の低さばかりを争う消耗戦を続けていることが最大の原因とみる。地元企業の成長を後押しするために建設的な助言をすれば見合った金利も受け取れるようになり、地方経済の活性化にもつながる。

地域金融機関の中には「いくら良い提案をしても、結局は安い金利を示した銀行に融資を取られてしまう」との不満も強い。だが、生き残りを図るには、大胆な発想の転換こそ必要となる。

画像処理サービス会社「とことん」(福島県郡山市)の荒井潤一さん(60)は1月20日、福島市のリサイクルショップ会社を訪れた。自社の画像処理技術を売り込むためだ。「インターネットで商品を取売する際、背景を白くして鮮明な商品だけの画像を載せた方がよく売れます」。荒井さんが訴えると、訪問先の担当者は大きくうなずいた。荒井さんは2009年、経営していたソフト会社が

倒産し、自己破産をした経験を持つ。タクシー運転手として生計を立てながら、再起を目指していたが、銀行の支援は諦めていた。それを支援したのが、福島銀行などが設立した「復活ファンド」だ。16年3月、1000万円を出資した。このファンドは投資の対象を「倒産経験者」に限定している。銀行は過去に会社を倒産させた人にはお金を貸さないのが通常だが、あえて失敗した経験をアラ

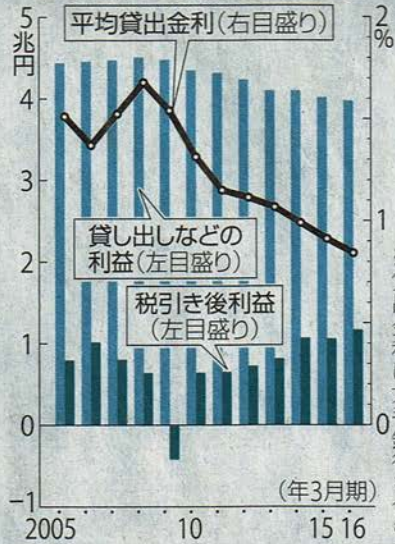
スに評価するという異色の取り組みだ。地元経済を活性化するため、本社を福島県内に置くことを支援の条件としている。

荒井さんは「事業が軌道に乗れば、地元大学から技術者を採用するなどして恩返ししたい」と話す。地域金融機関はバブル崩壊後、不良債権問題のトラ

ウマから「安全第一」に徹してきた。しかし、人口減でじり貧になるとの危機感から、「常識」の殻を打ち破って地元企業と向き合おうとする取り組みも出てきた。

甲府市の真珠製品製造会社「中込宝飾」の営業担当として国内外を飛び回る米山真史さん(37)。実は、山梨中央銀行(甲府市)の現

●地域銀行の利益と貸出金利の推移
低金利と人口減で稼ぎにくくなり、経営の先行きは厳しさを増している



※貸出金利は大手銀行を含む

「安全第一」から転換